

するものは之れを蒐め、是等論語に關する諸般の事項を史實、傳述、鈔寫、刊刻の四種に分ち夫れ夫れ年代に隨ひて列記したるものなり。論語外編及び和論語、女四書の如きその内容全く論語と同じからざるものも、尙その名を假りたるは論語流行の景況を見るべきものとして收めあり。上卷には序説として孔子の略傳、論語の編纂、周代に於ける論語の影響、漢代以後東西諸國に於ける論語流行の概觀を掲げあり。本編は即ち年譜にして尙附録として寫眞並に索引を附す。寫眞四十三葉は論語の古寫本、古刊本の傳を見るべく好參考史料たり。索引亦書名索引人名索引、論語引用語句索引に分ち用意周到なり(大倉書店、價三、八〇)

●滿、韓、地、理、歷、史、研、究、報、告 第三 東京帝國大學文科大學
大正四年一月南滿洲鐵道株式會社の委囑により滿洲及び朝鮮の地理歴史を研究せるものにして鐵利考(池内宏)、遼の遼東經略(津田左右吉)、五代の世に於ける契丹(松井等)、遼代紀年考(松井等)元代社會の三階級(筠内五)を列載し附圖として鐵利考附圖あり。(以上那波)

●涵芬樓秘笈第一集

辛亥鼎革以來支那各地雲擾せしかご上海獨り晏如たりしかば、遺老の善本を携へ地を避けて來るもの多し。涵芬樓は公司の力を以てそれ等の諸材料を蒐羅し收藏最も富むといはる。此秘笈はそ

の中より忠傳、續墨客揮犀、復齋日記、識小錄の四種を擇びて第一集となし之を八冊に分ちて出版せるものなり。

忠傳は永樂大典の卷四八五の下半と卷四八六の原本を影印せるものにして、大典の此部は撰人を著さず。文淵閣書目亦之を載せず。大典に閣外の書を取りし一證とすべし。四庫總目には存目の部に録し、四卷ありといへど、今存する所の大典には一冊に文臣鄭の子産より蕭何孔明宋瑩范沅俺等を経て元の歸陽に至りて止まり、武臣なければ完書にあらず。四庫存目中書も流傳少く、大典に更に稀なり。その文を見るに流俗本馬融の忠經を以て主となし、宋人平話の體に倣ひ史事を引いて以て之を闡演し、每事皆畫像を附せるも、記事單簡通俗にして史上の參考に資するに足らず、惟全體の體裁を見るべし。

續墨客揮犀十卷は宋の彭乘の撰。此書亡佚久しかりしを今般宋本を得、每葉十八行每行十八字の儘本書に影刻せり。内容は隨筆體にして往々有益なる史料を含めり。

復齋日記二卷は明の許浩の撰。明代前半の朝政を記し、間々前代の別録に及ぶ。然れども正統景泰の間の土木の變攝政復辟等の事尤も詳密なり。大約葉文莊の水東日記などと相表裏し、皆一時の見聞を傳述せり。原本は柱漏錯誤甚多かりしかごよく校正して本書を成せり。

説小録四卷は明季清初の徐樹丕の撰。記事多く俗俚雜説の類なれども參攷に資すべきもの少からず。殊に卷三には宋末語遺老の詩を録し忠憤慷慨の情筆墨の間に流露せり。

●明遺民録四十八卷

孫千怒撰

本書は程氏の宋遺民録、朱氏の廣宋遺民録に仿ひ作れるものにして、この兩書の一は僅に十一人、他は四百餘人を録せるに對し本書には凡八百餘人を傳せり。明末弘光永曆の間宗室遺臣の鹿耳を渡りて延平に趣くもの八百餘人、更に海を涉りて南洋に移れるもの二千餘人ありしが、本書は廣く明の遺民中より學德技藝に秀でたるものを選べるものにて、邱義、唐復思、胡承諾、方以智、鍾壽平、黃宗義、王夫之、陳洪綬、顧炎武、孫奇逢、萬斯大等より佛家、閩媛に及び、傳録細密ならずと雖、よく要を得又文飾少し。

●浙江圖書館叢書第一集、第二集

丁謙益撰

第一集には漢書、後漢書、三國志、晉書、宋書、南齊書、梁書、魏書、周書、隋書、新唐書、新五代史、宋史、遼史、金史、元史、明史等の外國傳又は外國に關する記事十七種の地理上の考證を三十五卷に編せるものにして、その凡例に史記匈奴傳は後來外國附記の始をなせども、漢書は之を採入し更に詳を加へたるを以て之を省けること、三國志記する所の外國の事蹟は過略なれども、幸に裴松之の注に黑象の魏略を増入し參攷に資すべきを以て之をも考證せること、遼

史に外國傳なく、金史亦殊に點漏なれども、他書に據り詳校補列して考證二卷を作れること、宋書の倭國傳、明史の撒馬兒罕傳は共に兩國の中國を埋侮せしこと明かなるに、千百年來之を指摘せざりしが本書殊に此事を明記せること、攷證の際には地望を攷り情形を度り方向を審にし遠近を察し時日を核し道途を考へ同異を辨じ疑似を缺ぐの八事を深く注意すべきこと等を擧げたり。而して本文には先づ原書の章句を掲げ逐次攷證を録し研覈大に努めたり。

第二集には穆天子傳地理考證六卷附中國人種所從來攷穆天子傳紀日干支表、晉法顯佛國記地理考證一卷、後魏宋雲西域求經記地理考證一卷、唐釋辨機大唐西域記地理考證一卷附錄一卷印度風俗總記一卷、唐杜環經行記地理考證一卷、元耶律楚材西游錄地理考證一卷、元秘史地理考證十五卷附元秘史作者人名攷、元太祖成吉思汗編年大事記、元初漠北大勢論、元史薛禪格思麥里速不臺郭寶玉等傳地理攷、邵佩辨、元聖武親征錄地理考證一卷、元經世大典輿地理考證三卷、附元史地理志西北地附錄、元張夢議耀卿紀行地理考證一卷、元長春真人西游記地理考證一卷、元劉郁西使記地理考證一卷、清圖理琛異域錄地理考證一卷等を取め全部三十四卷となれり。每書初に凡例を示して研究方針の大綱を明にし、本文の研究には洋書をも參攷し論辨詳密なり。一人にてよく是等三十種の地理的攷證を

なせるを以て悉く正確なりといふを得ざれども、博く諸書を参照して考察を施せるが故に頗る便利にして斬新なる見解を立てたる所も少からず。

●盾鼻集第一、第二

梁啓超撰

支那第三革命の記事にして初に蔡鍔の序文あり。全部を四編に分ち第一編公文には雲南致北京督電、雲南廣西致北京最後通牒電、雲貴廣西致各省通電、雲貴徵告全國文、護國軍政府宣言等を載せ第二編函牘には上大總統書、致蔡松坡第五書等を記し、第三編電報は簡短なるもの、第四編論文には國體問題與外交、闢復辟論等を録し別に附録として國體戰爭前歴史談、五年來之教訓等あり。

●吉石齋叢書六册

羅振玉編

此中には佛蘭西圖書館所藏の敦煌唐寫本尙書釋文殘卷、羅氏所藏の敦煌古寫本道書殘卷、同影北宋天聖本律音義、日本高山寺藏北宋本齊民要術殘卷、永樂大典本蔡波圖、敦煌石室本開元寫本木卯集注序錄殘卷、大雲音庫本唐寫本卜筮殘卷、知恩院藏古寫本三藏法師表啓、神田氏藏宋槧卷子本文殊指南圖讚、德富氏藏宋槧三藏法藏取經記殘本の十種を收め、何れも原書を影印して其碑を存せり。就中齊民要術は第五種桑種植種漆種監伐木等の部と第八種作花鹽作醬作醃等の部とを存し、蔡波圖は元陳椿の撰にてもと元初の提幹が作りと舊圖を補成せるものなり。此書は製鹽法

を順次圖説に依りて示せるものにして、圖は四十五個、何れも畫院の畫家の筆に成れる精巧無比なるもの、其影寫も極めて緻麗なり。而して圖後に一々説明と詩を附し、美術及び産業史上大に注意すべきものなり。

●古鏡圖錄三卷

羅振玉撰

卷上には紀年あるもの三十三面を集め、製作は漢の元興より明の洪武に至り、支那藏家の品より日本富岡氏桑名氏の所藏に及び、何れも皆古鏡中の逸品にして時代決定の標準となり製法變遷の次第を明示するものなり。卷中の六十九面、卷下の五十五面は皆文字刻鏤の精好なるを遴選せるものにして、銘辭なきもあれど多くは文字あり、形大に過ぐるは縮印し、卷下の終に近く西夏、契丹、金の國字を書せる鏡面あり。全數百五十有七、外に補遺二面あり。

●隋唐以來官印集存、同補遺、同附錄各一卷

羅振玉撰

本書には陳の成安門陳戶司治丞印を始め、隋の廣納府印觀陽縣印、唐の溫陽府印、雞林道經略使印、博陵郡印等より五代の秦使印に至る二十、宋の雲安軍印永定關統新部印以下指揮官印等四十八、遼の州綾錦院記印、西夏文字あるものを加へ西夏印全七、金の交鈔庫印印造鈔印都統印萬戶等七十、元の蒼魯花赤印國字ある等三十五、明印三十一、僭偽十等二百二十五印を收む。此中賀氏の集古官印考證に見ゆるもの四十三、翁氏の古官印考略に見ゆるもの四十四を

除き百三十八印は全く本書に依りて世に示されしものなり。尙補遺には宋一金八元三印を入れ、附録には唐五代宋十三遠一金十元六明十三印を取り、皆大に史上の參考に供すべきものなり。

●金泥、石屑、二卷

羅振玉撰

卷上には印子金、古矢鏃、合符師比、銅刀、銅器、銅鼓、銅幣、銅鐘、銅塔、銅牌等凡五十一品の墨拓を影出し、卷下には古墳、瓦當筒、提滿、泥塔、日晷、石鏡視等二十五品の拓本を収めたり。皆精品にして影拓のみにても甚だ有益なるものなり。(以上右高)

●西洋上古史

文學博士 村川堅固著

西洋に於ける古代史研究は日に月に進展して舊説は次第に破壊せられ、幾多の新發見に伴うて獨創的研究漸次發表せられ、斯學の面目舊套を脱して絶えず更新せられつゝある今日、我國に於ては依然として陳腐なる舊知識が流布せられて、邦文著書中新しき上古史の知識を傳ふるの甚だ稀少なるは實に遺憾とすべきなり。本書はこの闕陥を補ふべき好著として、大類博士の「西洋時代史觀、中世」と共に昨年に於ける西洋史界の双壁と稱すべきものなる本書中に現れたる所説は著者が最新の研究に據り、而も嚴正なる批判の態度を以て一家の見解を發表せるものにして類書中に見ることを得ざる注目すべき論定觀察渺からざるなり。本書通篇二十一章、これに緒論を附して約四百頁筆を最古の國民集團、エジプト、

バビロニア、メソポタミア、アフリカに起し、第二章にアッシリアの興亡、四國對立、第三章にバルシアの統一を述べ、第四章より第十章に亘りギリシア時代を、第十一章より第二十一章四ローマ滅亡に至る迄ローマ史を論叙したり。吾人は是等の各章によりて上古諸民族の隆替興亡、社會生活の推移發展、各時代文化の實相に亘り確實なる知識を收得し得べく、又興味深く有益なる所論見解に接するを得べし。殊に本書の文體が質實簡素にして、一般の歴史著述を觀るが如き慣用的の修辭浮誇の文飾を避け、平明にして而も力強き筆致を以て叙説せられたるは確に注目すべき所ならん。

●E. Lipson: An introduction to the Economic History of England. Volume I. the Middle Ages. (London, 1915)

本書は近時世に出でたる英國經濟史の好著にして、其第一卷中世の部に於ては Manor の起原、組織、沿革及農業界の革命に關する論述より、都市の發達、市場、商工組合、毛織工業の諸問題を説き、最後に對外通商及國庫財政の實相を叙述したり。右の内著者が最も力を注ぎしと思はるゝは都市生活並びに工業の發達に關する章句にして、問々創見と稱すべき點乏しきにあらざるも、大體に於て本書の特色は從來の諸研究をよく取捨撰擇し、綜合安排せるにありて、新しき見解論證は甚だ鮮なりと云ふべし。殊に